

作業中に出来形を判定

前田道路と法政大学（今井龍一教授）、三菱電機エンジニアリングが開発した施工管理に建設機械搭載型レーザー

スキャナーを取り入れる国内

最初の取り組みが、舗装工事の生産性を飛躍的に向上させる新技術として注目される。国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所は、秋田市河辺地区の国道13号河辺拡幅事業の一環で前田道

路が施工し、同技術を試行している河辺地区道路改良舗装工事で現場見学会を開いた（写真）。

このシステムは、舗装工の各層の面管理による出来形管理をリアルタイムにできる技術。国交省の2021年度「建設現場の生産性を飛躍的に向上するための革新的技術の導入・活用に関するプロジェクト」（PRISM）に選定されており、実用化に向けて同工事で効果を検証していく。

具体的には、建設機械後部に小型高精度の3Dレーザーを搭載し、自動追尾型トータルステーションと連携させることで、作業中に3次元点群データを計測しながらリアルタイムに出来形を判定する。このため、手作業が必要な地上型レーザースキャナーによる従来のICT出来形管理に比べて、作業時間の大大幅な短縮と人員の縮減に効果を發揮する。計測結果はウェブ上で発注者とリアルタ



地区の国道13号河辺拡幅事業の一環で前田道

りで、遠隔で施工管理の結果を施工する方法によるICT活用やBIM/CIMモデルの連携・段階的構築のさらなる推進が期待されている。

このシステムは、現地で開かれた見学会には、秋田県建設業協会の会員や県などの発注機関担当者など約30人が参加。同事務所の小笠原由次事業対策官のあいさつに続いて、藤井寛治建設専門官が国道13号河辺拡幅の事業概要、佐々木博臣工務二課長はi-Constructtionなどの国交省が推進する取り組みを紹介。同事務所はi-Construct

i-Constructionサポート事務所として、今後もICTフル活用工事の実施や地域の取組みのサポートを積極的に取り組む方針だ。

前田道路ら

河辺地区道路改良舗装工事

建機搭載型レーザースキャナーで施工管理